91　誌上発表　『隧穴啓蒙』について

山﨑　陽子
日本鍼灸研究会

『隧穴啓蒙』一巻は，江戸後期の天保2年（1831）に刊行された折本仕立ての経脈経穴書である．著者・梯謙（生没年未詳）は，名を謙，字を晋造，子益といい，南洋，梨亭と号した．徳島藩の藩士で，阿波徳島藩に招請され医学学問所で講義を行っていた小原峒山（1762～1822）から医学，本草学，経穴学を学び，峒山没後の文政6年（1823）から10年（1827）まで学問所で医経と本草を学館で講じている．天保2年（1831）に『隧穴啓蒙』を刊行し，同じく12年（1841）には南宋・元初の医方書『嶺南衛生方』を校刊している．

本書の梯謙自序によると，梯謙の経穴学の学統は，堀元厚→沢岐山→沢の次子・小原峒山→梯謙と伝承されたとあり，本書が堀流の系統に属する経穴書であることがわかる．

堀流の経穴学は，堀元厚の大著『隧輸通攷』に発している．その経穴学の特徴を一言で言えば，江戸期の標準的経脈経穴書である『十四経発揮』を基礎としつつ，経脈への経穴配当を変更し，かつ古今の経穴資料を援用して，部位の考証につとめる点にある．この元厚の経穴学は，元厚の嗣子・堀元昌と門人・沢岐山に伝授されたが，元昌はその唯一の著作『挨穴明弁』において，元厚の経穴の経脈配当の変更を継承しつつ，しかし考証的方向には深化せず，十四経の配列を変えて，肺経の前に督脈・任脈を置き，気海兪，関元兪などの奇穴十数穴を各経脈に附加し，また「通字号」と総称する十二支に身体各部の同身寸を配した「挨穴寸法」を以て経穴部位決定のための基準とする，独特かつ実用的な〈挨穴学〉を提唱した．他方，沢岐山の学を承けた峒山は，基本的に元厚と元昌の学説を継承しつつ，一時，博物誌的傾向性を強めたが，元昌の「挨穴寸法」は採用していない．また後期の著作では，『十四経発揮』から距離を置く姿勢すら感じられる．

本書では先ず冒頭に「凡例」と「採摭書目」を置く．「採摭書目」所載の書目は『霊枢』『素問』以下明清に至る32書目で，「本邦著作，コレヲ略ス」とあるが，骨度や同身寸を述べた箇所では『隧輸通攷』『巻懐灸鏡』『医学至要抄』『挨穴捷径』『経穴彙解』への言及や味岡三伯の按語が見え，本文細字注においてしばしば『隧輸通攷』を引く．また後半の奇穴の解説では一部に岡本一抱の『阿是要穴』も引かれている．

次いで「尺寸ノ弁」「尺寸ノ法」「同身寸法ノ」「一夫ノ法」「大椎ヲ定ムル説」「髪際ヲ定ムル法」「脊骨ノ弁」の各項によって取穴寸法の基準を示す．このうち「尺寸ノ法」では前述の挨穴寸法を採用している．

更に「挨穴篇」の篇名下に十四経ごとに所属経穴の簡明な解説がある．篇名からは元昌の書物が想起されるが，書中には元昌の著作からの引用や言及は見られない．また経脈の配列や経穴の経脈配当の変更はすべて元厚の説に従っている．他方，経穴の解説では所々に挨穴寸法を用いている．篠原孝市編「『十四経発揮』及び江戸期諸家兪穴比較一覧表」（未発表）に基づいてその様態を要約すると，直接の師である峒山よりもむしろ元厚の経穴学に拠りつつ，それに元昌の挨穴寸法を適用し，かつしばしば江戸後期の経穴書に見られるように，穴名は『甲乙経』によって改めている，というように要約することができる．なお各経脈最初にその経脈の彩色と穴数，穴の移動に関する注記が見られる．経脈の彩色は味岡三伯に始まる〈引経分色〉と称される経脈学習法である．

次に「経脈流注篇」が置かれているが，これは『霊枢』経脈篇の経文に簡単な割注を附したものにすぎない．その後に経脈の彩色の総括と穴図が置かれ，「腧穴総数」が述べられて本論は終わっている．なお本論の後に「奇兪類集」と題する附録が附加されており，そこでは頭面部，胸腹部，肩背部，四肢部に分けて奇穴が挙げられ，主治証と灸法が述べられている．

『隧穴啓蒙』は小冊であるが，堀元厚の経穴学と考証的方法を基礎とし，味岡三伯の引教分色と堀元昌の挨穴寸法を取り入れた，堀流経穴書の正統的な後継である．